MINAMI KYUSYU NO JOKAKU
南九州の城郭
第18号
南九州城郭談話会報
平成14（2002）年2月15日発行

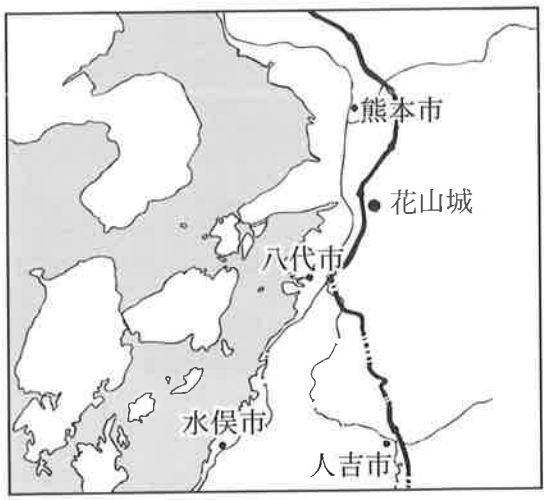
嶋津氏築城の花山城

鶴　嶋　俊　彦

1　はじめに

天正6年(1578)，耳川の合戦で宿敵伊東氏と大友氏の連合軍を破り，薩摩・大隅・日向三国の平定をなし終えた嶋津氏は，以後九州北部の平定へと動く。天正9年には肥後南部の相良氏を支配下に置き，以降は八代を拠点に肥前と肥後の大名・国人らを次々と下していくことになる。

花山城は，嶋津氏が天正11年11月，肥後国北東部の有力国人であった阿蘇氏の甲佐社領堅志田周辺における拠点城郭である堅志田城の向城・付城として築城した城とされる（註1)。『上井覚兼日記』や『薩藩旧記雑録後編』に築城の様子や交戦の様子が記述されており，

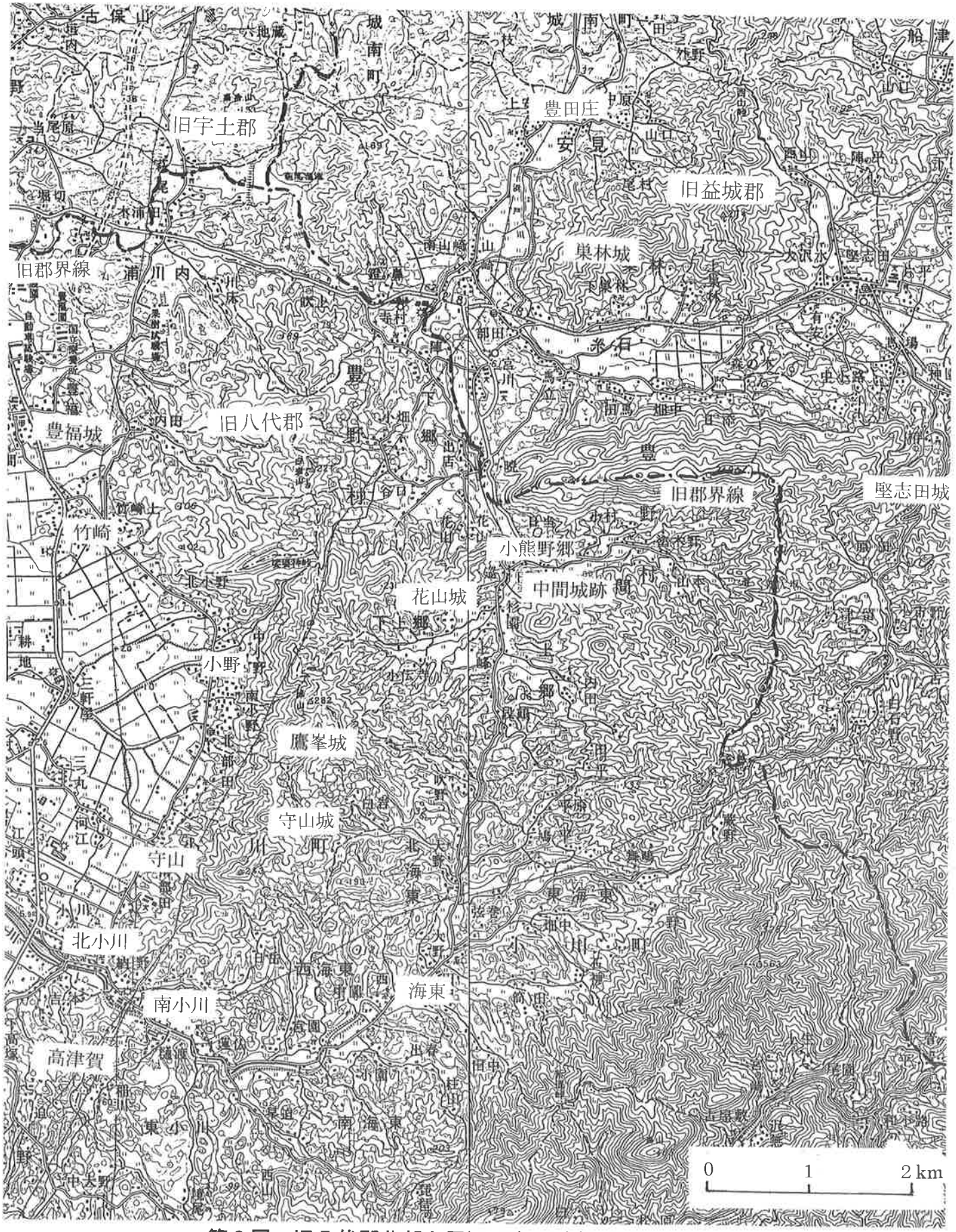


第1図　花山城の位置

天正13年閏8月の堅志田城の落城とともに廃城となったと考えられ，築城から廃城までの存続期間がおよそ二ヵ年に限定できる城郭である。これまで先学諸氏により紹介されているが，紹介された遺構以外の遺構も新たに確認しており，城跡位置にも誤謬があるものが多く，周辺の歴史的な環境についてもふれて，花山城の歴史的な位置付けを明確にしたい。

2　花山城とその周辺の歴史

後述するように花山城のある小熊野郷は、八代郡北東端に位置し阿蘇氏の領域に接する境目の地域であった。さらに複雑なことに背後の八代郡海東・小川は阿蘇末社の甲佐社領であったところで，その周辺の八代北郷の支配権は南北朝内乱以降，相良・阿蘇・名和三氏により争奪が繰り返され流動的な所領形態であった。16世紀初頭頃，阿蘇大宮司の阿蘇惟憲の二子である惟長（＝前肥後国守護菊池武経）と惟豊は，阿蘇家家督の争いにより二派に分かれ，大永3年に薩摩に逃れていた惟前は勢田尾城（堅志田城）を城取りし惟豊方と合戦するなどして甲佐・堅志田・砥用（ともち）・中山を獲得したが，天文12年に惟豊の軍によって堅志田城が落城し，惟前は相良氏を頼り八代に亡命した。この間，相良氏は惟長・惟前方と同盟関係にあり，



第２図　旧八代郡北部と周辺の中世城郭（図福上が北）

花山城背後の山稜「たかの峯」に城取り（九万城跡）し，芦北衆を堅志田城番に派遣，八代衆を小熊野の番に派遣するなどして，相良氏所領である小熊野・豊田の維持に努めている。堅志田落城後，豊田庄・小熊野郷の相良氏支配は終わり，代わって阿蘇惟豊方の支配となり，相良氏が再び領主となることはなかった。以後，係争の舞台は豊福を中心とすることになった。

次に，天正９年以降の様子を見る。天正９年，相良氏は水俣城の落城により嶋津氏の配下となり，同年12月に御船城主甲斐宗運討伐のため出陣し響野原において野営中を急襲され討死した。天正10年11月22日の宗運の和議申し出も決裂，翌11年９月に嶋津方の上井覚兼らが小熊野に侵攻し村々を破却した。同年10月７日には堅志田合戦の際，嶋津方は堅志田城攻めのための陣城（向城）構築のため巣林の「蓮生寺の上」の下見をさせるが実現せず，同年10月28日，早朝から「花之山囲」の築城に執りかかり，11月１日には概略完成し，遅くとも12日後の11月10日までには完成しているようである。その城将は，花山城が海東・小野・守山などの守りのための築城であるから，地下衆があたるべきとの理由で八代地頭である平田光宗が推されているが，光宗は何故か固辞し続ける。この花山築城の間，阿蘇氏方は２回にわたり堅志田と小熊野境の「道善寺之尾」に築城の様子を窺っている。翌年２月20日には阿蘇方が花山城の向陣を築くとの風説が上がっている。

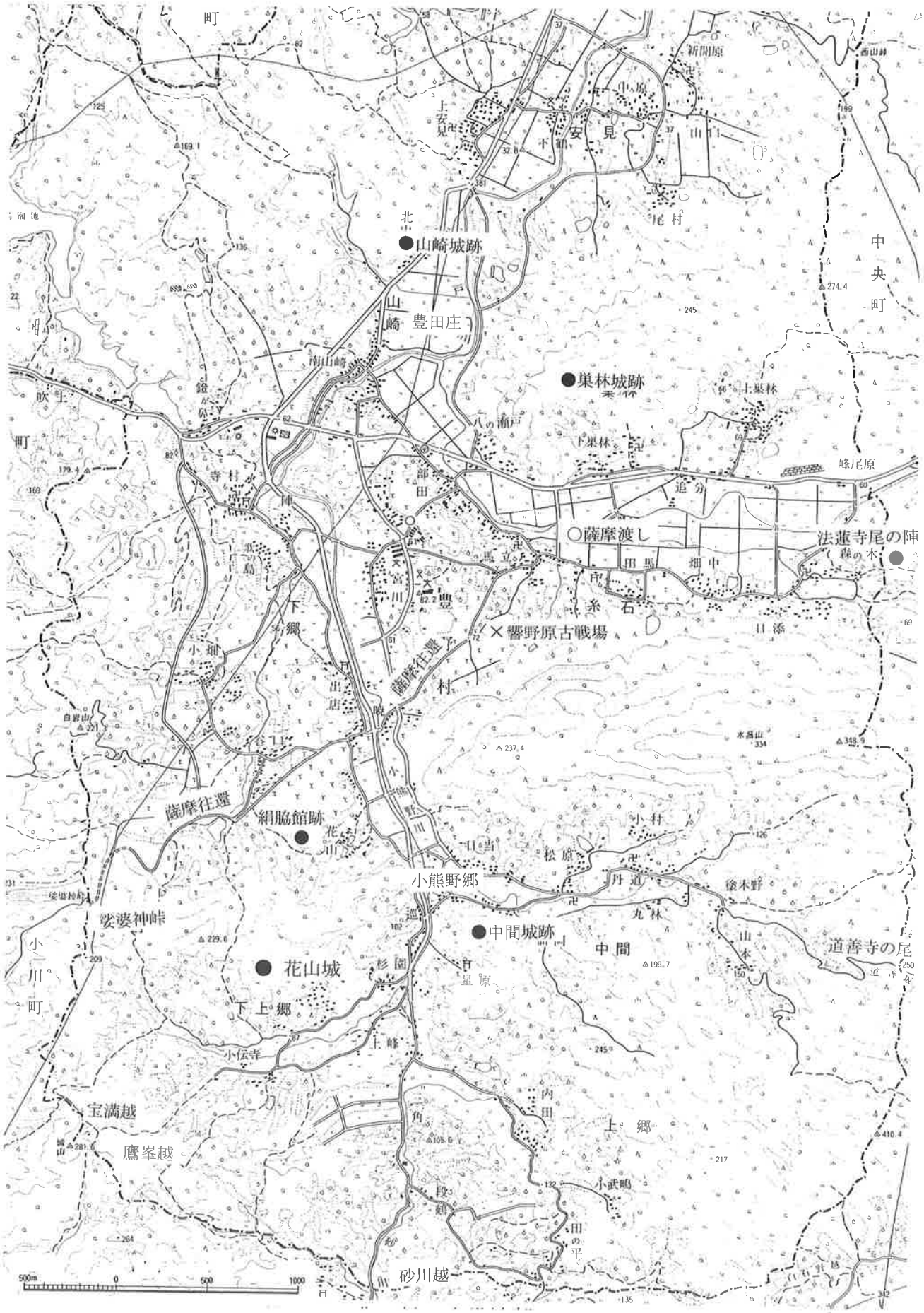
天正13年７月３日，甲斐宗運が死去し，８月12日にその次男の相模守親則（親乗・親教）が花山城を攻撃し，小熊野地頭（花山城番役）の木脇（絹脇）刑部左衛門尉祐昌，薩摩入番の鎌田左京亮らを討ち取り落城させた。このため，阿蘇神領への侵攻を控えていた嶋津氏は大軍をもって堅志田に侵攻し，「寶蓮寺之尾」に陣を置いて堅志田城などを襲い，甲斐氏・阿蘇氏を降伏させている。

3　城跡位置と周辺の歴史的環境

花山城跡の遺構は，現在の行政区分では熊本県下益城郡豊野村大字下郷字花ノ山の「新城」と呼称される山中にあるが，「熊本県の中世城跡」・「日本城郭大系」・「堅志田城跡」では小川町・豊野村境界の山稜に，「熊本県遺跡地図」（熊本県教育委員会　1998）では城跡の北西の尾根に遺跡表記がしてある。

現在，八代海（不知火海）の海岸部の松橋町・小川町は下益城郡管内にあるが，古代律令制下以来，戦国時代末まで，上記２町の地域は八代郡内に含まれており，加藤清正統治下に益城郡に組み込まれている。その松橋町・小川町と豊野村との町村界となっている標高169～282ｍの南北に伸びた山稜の東側，緑川支流の浜戸川およびその支流の小熊野川によって形成された河谷平野は，豊田庄・小熊野（おぐまの）郷と呼称された場所である。史料によれば，豊福・小熊野も八代郡の域内であり，豊福の北は宇土郡，小熊野の北と東は益城郡豊田荘・堅志田に接する八代郡の境目の地域であった。花山城跡は前記の山稜の東側，小熊野郷側に派生した標高225.7ｍの尾根上にあり，小熊野郷および豊田庄の河谷平野を望むことができる。当城跡東方標高334ｍの水晶山山塊の向こう側には阿蘇方の拠点城郭である堅志田城跡が位置するが，互いに城を遠望することはできない。一方，嶋津方が天正11年に堅志田攻めの陣城としようとした「蓮正寺の上」は字蓮生寺の地名から大字巣林の巣林城跡に比定され，ここからは堅志田の城下を遠望できる。

花山城跡の北東麓には花山の集落があり，その北側段丘面の字中丸（なかのまる）の最も小高い場所には「絹脇館跡」（註2）とされる中世の遺跡包蔵地がある（註3）。「絹脇館跡」は花山城の守将である絹脇（木脇）氏に関わる伝承により命名された遺跡で，天保年間銘の「絹脇刑部左衛門尉」とその従者の供養碑があり（註4），北側隣接地のミカン園開墾では土師器が



第３図　豊野村の中世城郭（図福上が北）

多量に出土したという（註5）。また，その直ぐ北側の段丘端には娑婆神峠から響野原・堅志田への「薩摩往還」と呼称される古道が通過する（註6）。一方，小熊野川を挟んだ対岸の段丘上には中間城跡がある。中間城跡は『八代日記』天文10年6月19日，豊田・小熊野に八代人数が到着し，天文11年閏3月4日条に相良氏の八代衆が番立した小熊野（城）に比定できると思われる。ただし，天文12年5月8日の阿蘇惟豊の攻撃による堅志田城落城（城主阿蘇惟前は八代に亡命），同14年年5月1日の阿蘇惟豊との境目和談により豊田庄・小熊野郷の支配は阿蘇惟豊側に移っているとみられるので，相良氏による小熊野（城）の使用と小熊野郷の直接支配の期間は極めて短かった。なお，天正9年の嶋津軍先鋒の相良義陽と阿蘇氏側甲斐宗運との「響野原合戦」が行なわれた響野原は，城跡北東の浜戸川と小熊野川に挟まれた段丘上である。

史料にある阿蘇氏側が花山城普請を窺った「道善寺之尾」は，豊野村と中央町との境（八代・益城の郡境）の山稜の道善坂付近である。

なお，海岸部の小野・守山・小川・海東から小熊野郷への山越えのルートとしては，娑婆神峠・宝満越・鷹峯越・砂川越の4ルートがあり，花山城はこれら全てのルートを眼下で監視できる位置にある。

4　花山城の構造

花山城跡の構造は，比高125mの尾根ピークを主郭に，その東西に腰曲輪・帯曲輪を配し，北東に出曲輪を置いたものである。主郭は東西18m，南北10mの地形に即した楕円形の形状で曲輪面は丁寧に平坦化されている。その西側3m下に東西25m，南北11mの平坦な曲輪があり，この両曲輪を囲んで切岸の高さ3～4mの小規模な腰曲輪と帯曲輪が配される。主郭の西側直下には幅4mの竪堀状の遺構があるが，これは遺構配置から西側曲輪と南側帯曲輪との連絡用の通路に利用されたとみられる。

城地は西側の山稜からの派生尾根にあるため，この方面からの攻撃に対処するために6段の連続腰曲輪が付けられる。西側の尾根との境は，削り落として馬の背状に加工された鞍部となり，鞍部の南北両側には1段づつの腰曲輪が付く。

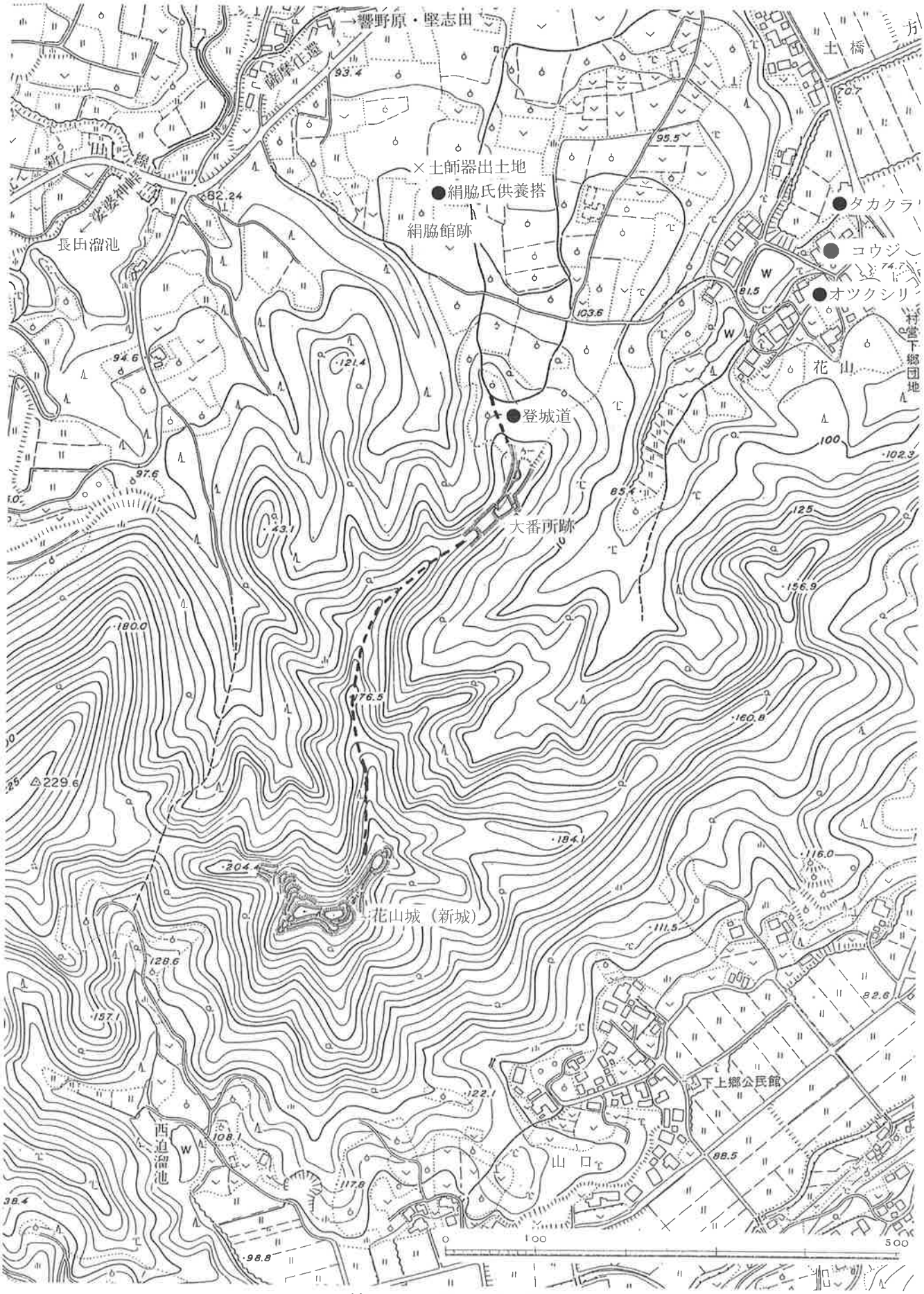
一方，主郭から北東に伸びた尾根先端には10×15mの平坦に加工された標高210mの出曲輪があり，東斜面には2段の腰曲輪が付いている。主郭と出曲輪とは馬の背状の狭く細長い通路によって連絡できる。主郭部・出曲輪とも城跡の北斜面に腰曲輪がないのは，この部分の斜面が急斜面で防御の必要性が薄かったからと判断される。

また，登城道は，出曲輪の西側に現在でも残る山道とみられ，この尾根道を下ると麓の「絹脇館跡」に通じる。その途中には『肥後国誌』「絹脇館迹」条に見える「大番所」跡と伝わる「バヤンモト」（番屋元カ？）の小名が残る（註7）。「バヤンモト」の場所は，城跡の位置する丘陵と「絹脇館跡」のある段丘面との境の傾斜変換点近く，標高140mの尾根先端にあり，高さ3mの切岸による幅15m×長さ18mほどの平坦な曲輪面が造成されている。『肥後国誌』「絹脇館迹」条の「絹脇館跡」の南二町ほどのところに「大番所」があった，という記事に整合し，また，花山城との距離も『薩藩旧記雑録後編』「長谷場越前自記」の「城と番所の間を一里隔て居たりしが」という記事にも整合する。

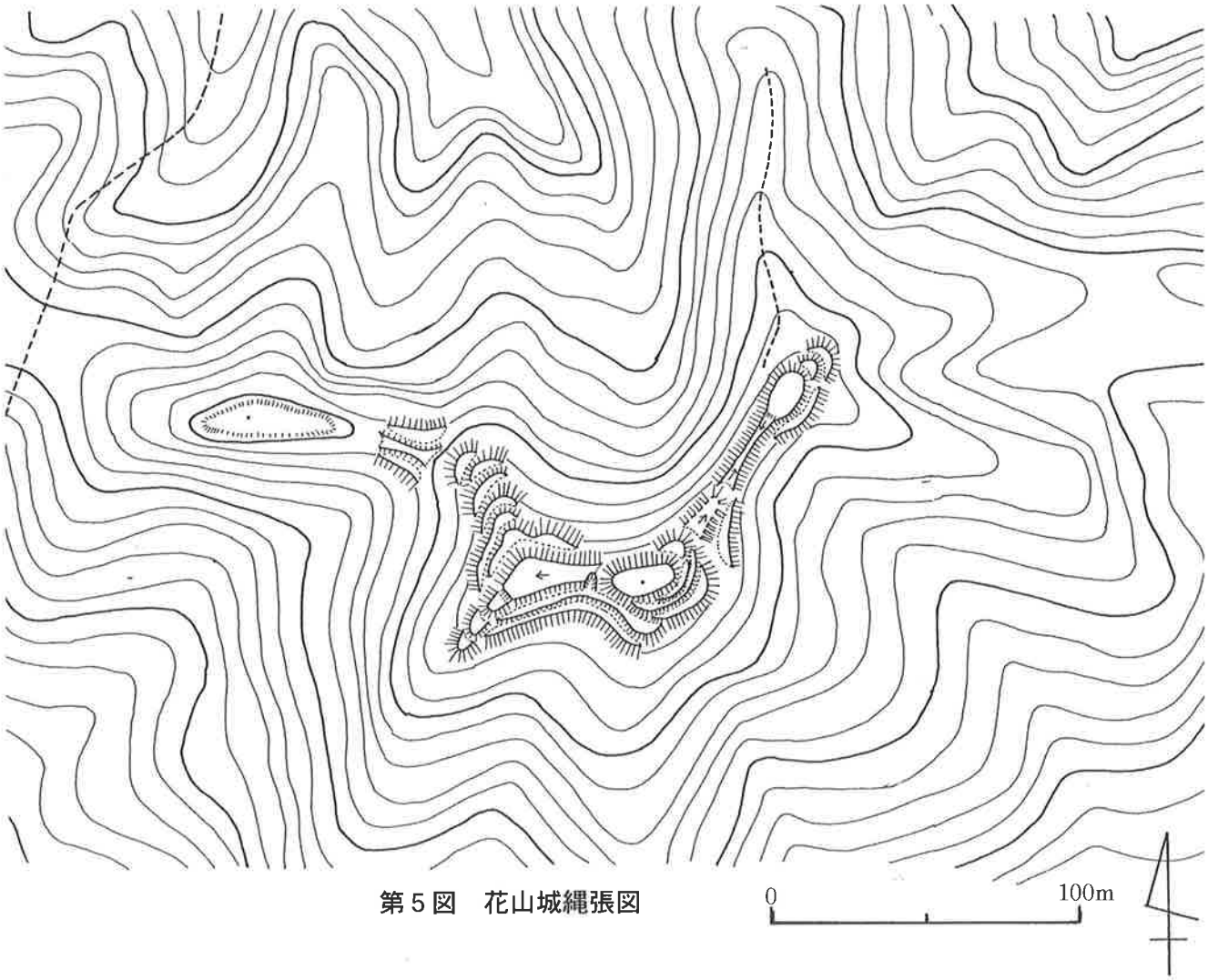
以上，縄張の観察からすると，花山城は堀切や横堀，竪堀をもたず，切岸による曲輪の造成のみで主郭部と出曲輪を普請しただけの安普請の城跡と考えることが出来るが，北麓の小熊野地頭の館と密接な位置関係にあり，常の陣所は麓に置き，詰の城として花山城が用意されたことが推定できる。

5　結　　語

史料からみた花山城は，「甲斐頭（海東）・


響野原・堅志田
土橋
×土師器出土地
絹脇氏供養搭
絹脇館跡
長田溜池
タカクラ
コウジ
オツクシリ
花山
登城道
大番所跡
花山城（新城）
下上郷公民館
山口
西迫溜池
0
100
500

第４図　花山城と麓館



第5図　花山城縄張図

小野・守山なと挌護之為之拵」（『上井覚兼日記』天正十一年十一月三日条）であり，境目（小熊野）そのものの守備よりもこれに接した領国内部（海東・小野・守山など）の守備に重点があった（註8）。ここに領国最前線に築城された端城の役目を見出せる。その城番役は八代地頭である「境目役の平田光宗の他は適任なし」（同条）とされたが，結果的に城番役（城代）は上井覚兼配下の木脇刑部左衛門尉祐昌となり，求麻・八代の衆を薩摩勢に加えて番勤させている（註9）。

臨戦下の最前線において築城された経緯があり，実際の普請日数も12日間と，急拵えの城郭であったことを想像させるが，現地に残る城郭遺構もそれを裏付けるように，切岸と曲輪の構造からのみなっている。こうした簡易な城郭構造の類例は，県下では南北朝内乱時の山頂部などに築城された小規模な城郭に認められるところであり，天正11年段階においての嶋津氏は，臨戦下の最前線の端城として，花山城程度の普請で十分足りると判断していたのであろうか。登城道が出曲輪の西側に残る山道とみられ，山道の麓にある字中丸の「絹脇館跡」に通ずることからすると，城番役の絹脇（木脇）氏の通常の駐屯地は，城跡北麓の字中丸の段丘上に求められ，山上の城郭は篭城戦において使用する詰城として築城されたものであろう。

阿蘇氏側と対峙する花山城は天正13年8月12日に甲斐親則らの攻撃を受け，番将の木脇氏と入番役の鎌田左京亮政虎ら三十余人が討死し落城している。いとも簡単に落城した理由は史料では明らかでないが，守備兵の少なさの他，一因として鉄砲の使用されるようになっ

た当時の戦闘法の変化に対応していない手薄な城郭構造そのものにあったことも考えられる。

一方，『薩藩旧記雑録後編』「勝部兵右衛門聞書」には，「花山を攻ん事ハ尤輙（たやすか）ルへし，彼城落居之由薩摩へ相聞えなハ，定て大軍差上せらるへし，其時誰か是を防ん，阿蘇家の大事極るへし，阿蘇家をおもひあなとって，境目ニケ様の玩弱なる小城を取るヽ事こそおそろしけれ，無勿体と云て，大に制らる」と，次男甲斐親則の花山城攻めを戒めた甲斐宗運の言葉が記されている。この言葉が甲斐宗運自身のものか不明だが，最前線に築城された花山城が敢えて阿蘇氏を侮るような粗末な小城であることを，少なくとも嶋津側は認識していたことが窺われる（註10）。

そうであれば花山城築城の目的は，攻城をめぐる実際の戦闘を十分に予想したものではなく，端城を築くことによって生じる阿蘇氏に対する軍事的な威圧に重心を置くものであろう。さらに憶測すれば，神領である阿蘇氏所領への侵攻を躊躇う嶋津家臣団の戦闘観念に配慮し，あえて攻撃を受けやすい普請に留めて阿蘇氏側からの攻撃を誘い，阿蘇氏所領への本格的な侵攻の契機とするという，深慮された戦術があったのではないだろうか。

註

(1) 阿蘇品保夫・大田幸博他「熊本県」『日本城郭大系』18　新人物往来社　1979。

(2) 『肥後国誌』「絹脇館迹」条。

(3) 「熊本県遺跡地図」熊本県教育委員会　1998。

(4) ２基の供養碑がある。一は北面する表面に「絹脇刑部左衛門尉」，裏面に「居士薩州嶋津家之将士也，奉君命来而守花山之營有年于茲／天正之乱興御船之城主甲斐宗隆相戦而死，實天正十三年／八月十日也，法名諡曰法雲院殿花山道春大居士，是歳天保五年／膺于二百五十年之遠忌，遠孫某甲建此一片石于茲以／聊旌追遠之寸哀者也」とあり，二は西面する表面に「絹脇氏従者群霊塚」，裏面に「天保四年癸巳八月十日／絹脇安太恵良謹建之」の銘文がある。

(5) 開墾者の花山2,574番地，城塚文雄氏の聞き取り。

(6) 谷口3,138番地，大谷正一氏の聞き取り。

(7) 城塚文雄氏の聞き取り。

(8) 『薩藩旧記雑録』「長谷場越前自記云」では小野・守山と松橋・小川之為ニとて，花が山と云へる御城を被取せ，移衆少々被指置」とある。

(9) 『薩藩旧記雑録』「長谷場越前自記云」

(10) 上井覚兼らの寄合衆の再三にわたる要請にも拘わらず，八代地頭である平田光宗は花山城番を承諾していない。寄合衆の入番を条件とするなど，花山城が粗末な小城であることからの不安も一つの理由ではないだろうか。

参考文献

(1) 熊本県教育委員会『熊本県の中世城跡』1978。

(2) 阿蘇品保夫・大田幸博他「熊本県」『日本城郭大系』18　新人物往来社　1979。

(3) 菖蒲和弘「文書・日記から見た堅志田」大田幸博編『堅志田城跡』中央町教育委員会　1989。

(4) 花岡興輝「中世」『豊野村史』豊野村　1991。

お　知　ら　せ!!

三木靖会長，平成13年度鹿児島県文化財功労者表彰!!

この度，本会の会長である三木靖先生が，第１回の県文化財功労者として表彰されました。平成13年11月１日に，鹿児島県立埋蔵文化財センターで授与式がありました。文化財功労者は地域における文化財の保護に尽力し，地域文化の振興に功績のあった個人や団体を表彰するために創設されたものです。

三木先生は，多年にわたり県文化財保護審議会委員・会長として活躍し，南九州城郭談話会を通じて文化財愛護思想の普及に尽力していることが認められたもので，本会の今後の活動にとっても朗報となりました。

◆◆第17回例会・見学会・総会（5周年記念大会）報告◆◆

出　口　浩　二

南九州城郭談話会は平成7年の12月発足後，今年で6年目を迎えることとなった。例会・見学会は早くも18回を数えることとなり，年に3～4回のペースで会を進めていることになる。この間，会報「南九州の城郭」を発行，すでに17号に達している。また，機関誌「南九州城郭研究」を創刊し，平成12年には早くも2号を刊行している。会員も発足時の30名から250名近くに急増し，山城についての人々の関心の高さを示している。研究会の運営と会費の徴収，会案内の事務等についても，発足時とは比べられない煩雑さを呈しているが，三木会長のもと幹事役員の奮闘で，なんとか5年目を迎えることができたというのが実感である。

今回は5周年記念大会として，室内の例会1日と野外の見学会1日の2日間盛り沢山の内容の日程で実施された。例会120名，見学会70名（マイクロバス2台）の参加者があり，盛大な記念大会となった。以下，会の内容を概述しておきたい。

〔Ⅰ〕1日目　総会　講演会　研究発表会

・日時　平成13年5月26日㈯10時～16時

・会場　鹿児島県歴史資料センター黎明館

① **総会**　上田事務局長による平成12年の活動　内容と平成13年の活動計画の説明，19回は　宮崎県えびの市の飯野城など，10月下旬頃予定。福永会員による会計報告と成尾監査員による監査報告。下鶴幹事による機関誌発行，特別会計収支決算報告ほか。議事進行，末永会員。

② **講演会**　三木靖会長「南九州城郭成立期の様相」

鹿児島県史料，旧記雑録前編から確実な城郭の初現の記録を建武2年(1335)12月30日の条に求めた。すなわち土持宣栄が「島津庄穆佐院政所」に立てこもった伊東祐広等を攻める記録にある「彼城」に馳せ向かい激しい合戦をする部分である。この城が島津の庄穆佐院の「政所」であり，地方の役所に関連していることはいうまでもない。

これらのことから城郭は1335年に初めて確認できたとしたが，城が突然出現することはありえないので，実際はそれ以前から使われていた言葉であるとした。1200年代にも城の前提になるものが多くあったものと考えられる。

延元2年・建武4年(1337)薩摩（伊作）でも庄民と領主が防衛施設として城郭を築いている（兵農一致）。このようにして南九州では1335～1337年に合戦を前提とした城郭が全面的に登場するのであるとまとめられた。

③ **研究発表会**

・高梨　修「琉球弧地域におけるグスクの一様相－奄美大島名瀬市グスク詳細分布調査報告－」

・若山浩章　縄張図と歴史史料

・堂込秀人　南九州の竪穴建物跡と中世城郭

・東　政和　伊集院町一宇治城出土遺物状況

〈調査速報〉

・吉本正典　宮崎県の中世城館調査速報

・橋口　亘　鹿児島県の中世城館調査速報

・上田　耕　国指定史跡知覧城本丸跡の調査

・常田和彦　伊作城跡の発掘調査報告

・重久淳一　鹿児島神宮社家屋敷跡の調査

今回は高梨氏の名瀬市のグスク調査の発表が注目を集めた。平成7年から11年までの5年間にわたる詳細な分布調査の成果である。ハブの生息する名瀬市内の尾根という尾根，丘陵という丘陵をすべてしらみつぶしに調査

していくという徹底した調査方法に最も感銘を受けた。その調査成果は大きく，これからの奄美諸島の中世史の研究の基礎資料になるものと思われた。

氏は確認した遺跡の特徴を次のようにまとめている。45箇所の遺跡を確認したが，グスク名を備えているものはわずか5箇所しかないということ，この大多数のグスク名称のない遺跡を直視して「城郭遺跡」と仮称し，グスクと区別して検討すること，城郭遺跡は中世城郭と共通する形態構造をもつこと，1集落に複数遺跡が存在すること，小規模遺跡が群集すること，ノロ祭祀伝承が残されている遺跡が多いことなどをあげている。そして今後は発掘調査による遺構・遺物の確認と年代の決定そして民俗学の視点を含めて多様な方向から調査研究を進めなければならないとしている。

今回の調査結果は琉球王府の奄美統治や南九州の武家勢力の侵攻の問題，そして「グスク時代」そのものの概念等についても大きな問題を提起したものと考えられた。

若山氏は倉岡城の例をあげて，氏の持論である文献資料と考古学の成果のすり合わせの問題を展開された。城郭の遺構・遺物の細部のみに突き進んでいくと，中世社会における城郭の意味を見失いがちになる危険性を指摘された。

堂込氏は中世城郭内の竪穴建物跡に注目して，流通に関連する機能性を有した施設で，鉄・革などの加工場所を想定した。今後，調査にあたっては注意を要する遺構である。

〔Ⅱ〕 2日目　見学会

・日時　5月27日(日)　9時～15時

・見学場所　鹿児島市北部山城跡（右地図）

・説明者　　郷土史家　西元　肇先生

酷暑の中，西元先生の熱心で軽妙な説明を受け6つの山城を早々に駆け廻った。都市空間における山城の保存問題を考えさせられた。

山城見学地図　　1川上城　2催馬楽城　3清水城　4東福寺城　5内城　6上山城

◆◆第18回見学会報告◆◆

下　鶴　　弘

◎　見学会

平成13年12月2日，集合場所である加世田市運動公園の体育館前には早くから参加者が集まった。見学会は予定通り午前10時から始まり，約40名の参加者を数えた。三木会長の挨拶の後，上田事務局長より日程説明があり，今回は研究発表を省略した旨報告がなされた。別府新城の案内は加世田市教育委員会の福永会員と県埋文センターの橋口会員にお願いした。

別府新城は運動公園の一角に残っている。別府城は曲輪群から新城と東城に分かれ，文献によれば，新城は本丸城・大欣城・西之城，東城は福寿城・尼ヶ城・中城の各城から構成されていたという。築城は加世田の開発領主である別府氏という。天文7（1538）年，薩州家の支配下にあった別府城を，相州家島津忠良は攻略し，天文9年には山麓に居館を構えている。案内いただいた曲輪群Aは土塁の残りが良く，中世的雰囲気を漂わせていた。

案内者である橋口氏は，「近世麓が中世山城である別府城の周囲に近接展開している関係上，帯曲輪的部分については近世武家屋敷地として利用がみられた」と指摘し，非連続性の知覧城との対照性を強調している。次の見学地である知覧城へは各自車で移動し，知覧町教育委員会の上田会員と坂元氏に案内していただいた。知覧城では史跡整備のための発掘調査を実施しており，今回は主郭を構成する蔵之城を見学した。蔵之城では土塁の断面や建物跡の検出状況の説明を受けた。7間×4間の規模は主殿と想定されている。知覧城では参加者へゼンザイが振る舞われ，温かいもてなしに感謝したい。

加世田市別府新城跡にて（H13.12.2　重久写）

機関誌３号原稿募集

今年の秋に刊行を予定しています。奮って御応募ください。

<仕　様>

１．Ａ４判　縦書き　本文10.5歩

２．１頁　１行33字×26行×上下２段組
　　＝1,716字（四百字原稿用紙４.３枚）

<目　次>

１．論　文　　400字×50枚程度（図版註含む）

２．研究ノート　400字×20枚程度（図版註含む）

３．史料紹介　　400字×５～20枚程度

４．城郭関連文献一覧

５．図書紹介・書評

６．わが町のお城拝見

＊　原稿提出は，印刷原稿とフロッピーをご一緒に提出ください。

＊　送付先　■899-5421
鹿児島県姶良郡姶良町東餅田４９８
姶良町歴史民俗資料館気付
南九州城郭談話会
機関誌編集長　下　鶴　　弘　宛
・0995－65－1553

第19回 見学会 案内

－肥前名護屋城見学会－

日　　時　平成14年２月23日(土)・24日(日)

集合場所　西鹿児島駅前駐車場

出発時間　９：００

参 加 費　21,000円

コ ー ス

（１日目）　９:00　発

西鹿児島駅前駐車場 ⇨ 佐賀県立名護屋城博物館・肥前名護屋城跡（鎮西町）⇨ 唐津市内泊

（２日目）　８:30　発

唐津市 ⇨ 島津義弘陣跡 ⇨ 博多元寇防塁跡 ⇨ 福岡市博物館⇨田中城跡（三加和町）⇨ 西鹿児島駅

【新入会員】　（２月５日現在）

石坂　道明　　内倉　昭文　　大屋敷良子
坂田淳一郎　　堀口　隆之　　渡辺　芳郎

機関誌『南九州城郭研究』第２号

残部僅少！

購入希望の方は，下記手続きをお願いします。

・最寄りの郵便局において代金1,500円（非会員は1,800円）を「**口座番号　01760-3-84609，南九州城郭談話会**」までお払い込み下さい。確認次第，第２号を送付します。なお，送料は当方で負担します。

・問合先

〒899-5421
鹿児島県姶良郡姶良町東餅田498番地
姶良町歴史民俗資料館　気付
下　鶴　　弘
TEL 0995-65-1553
FAX 0995-66-5820

編　集　後　記

◆第18号をお届けします。昨年５月以来の発行で大変遅くなりました。会費の値上げをした途端の体たらく，大変申し訳なく思います。例会・見学会が開催される都度，刊行するという図式が崩れ，出口・下鶴氏による，それらの報告が２本同時掲載となりました。お詫び致します。

◆今号には，鶴嶋俊彦氏からの論考１本のみとなりました。今回は，なかなか原稿が集まらず，藁にもすがる思いで，いつもながら氏へ甘えてしまいました。感謝に絶えません。

◆次号の会報が速やかに刊行できるよう，皆様方の御協力を宜しくお願い致します。次号の会報発行は，５月上旬の予定です。原稿は下記まで。　(Shige)

重久淳一 〒899-5106 姶良郡隼人町内山田1138-5

南九州の城郭　第18号

発行所　鹿児島県川辺郡知覧町郡17,880
ミュージアム知覧内 上田耕気付
南九州城郭談話会
（振替口座 02040－6－7850）

発行者　三　木　　靖

編集者　重　久　淳　一

印刷所　㈱ト ラ イ 社

入会金500円　年会費2,000円